



TITLE:

# 長期總力體制の確立と「いへ」の 論理

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 長期總力體制の確立と「いへ」の論理. 經濟論叢 1941,  
53(6): 669-684

ISSUE DATE:

1941-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/131621>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經 濟 論 叢

號六第 卷三十五第

月二十年六十和昭

## 論 叢

支那の二五減租問題……………

經濟學博士 八木芳之助

生産の理論の一節……………

文學博士 高田保馬

ナチス勞働時間保護の原理……………

經濟學士 中川與之助

獨占的競争企業とその規模……………

經濟學士 大塚一朗

普通銀行の金融機構に於ける機能とその統制……………

經濟學博士 小島昌太郎

## 時 論

長期總力體制の確立と「いへ」の論理……………

經濟學博士 石川興二

## 研 究

愛知縣毛織物工業における金融……………

經濟學士 田 杉 競

テニルゴの精神進歩の理論……………

經濟學士 出口 勇 藏

## 說 苑

支那の工業合作運動について……………

經濟學士 菊田 太郎

## 附 錄

外國雜誌論題

本誌第五十三卷總目錄

## 長期總力體制の確立と「いへ」の論理

石川 興 二

## 一 長期總力體制確立の要請

日本がこれまで戦ふた日清日露の戦争は二年にも満たざるものであつた。然るに支那事變は既に四年半にならんとし、尙ほ前途の見通しが立ち難い有様である。加之今やそれは世界戦争の大きさに擴大され非常に長期化されんとして居る。日本はこの戦を戦ひ貫かねばならないのである。

これまで主として英米より資材を得て居た日本は、日獨伊條約の成立によつてこれが斷念を覺悟しなければならなかつた。而し東亞の資源の多くは尙ほ眠れる資源でありこれを開發する爲めには少なからざる資材が必要であつて、日本はこれを白人諸國の孰れかに求めなければならないのである。然らば英米の代はりにこれを何處に求むべきであつたか、日獨伊條約の中には、ソ聯との現状維持が規定されて居た。この條約の成立當時獨逸とソ聯との間には不可侵條約が締結されて居り、經濟的援助が結ばれて居た。日本はシベリヤ鐵道によつて隣邦ロシ

ヤの領土を通じて、獨逸より高級の資材を得ることが出來た。また獨逸の應援をも得てソ聯との經濟關係を密接にしてこの資源國ソ聯の資源を利用し得る可能性を有して居た。松岡外相はこの方向に努力して、ソ聯と中立條約を締結し更に經濟條約を締結するまでに至つた。その額は僅三千萬圓ではあつたが而もその増大を將來に期待し得べきところのものであつた。

この日獨伊條約には更に大きな世界史的意義が含まれて居た。近世に於て日没するところなき大帝國を地球上に確立し世界の資本主義體制の支配的地位に立てる英國は第一次世界大戰に於ても遂に獨逸を破つてその地歩を確保し、今や第二次世界大戰に於ては米國と結んでこの世界資本主義體制の保持を益々強化せんと努めつゝあるのである。この數百年に亘つて根深く打立てられたる世界の舊體制を打破すると云ふことは容易ならざる仕事である。この爲めには新興國が一致してこれに當ることが必要であることは、第一次世界大戰の結末が事實をもつて教へたところのものである。日獨伊條約は正にこの方向に進みつゝあつた。即ちその條約の中には當時獨逸と不可侵條約並に經濟提携の關係にあつたソ聯との現状維持が殊更に規定されており、これを準樞軸國たらしめ、更に日本とソ聯との關係を密接化する方向に進みつゝあつたのである。この方向が押し進められて行くことによつて日獨伊ソの新興國家群の結成が益々強化し來りその結成力を以て英米が保持せんと努力する舊體制を破ることの可能性が大となるのであつた。

然るに突然不幸にして獨ソの間に戰が開かれることゝなつた。このことにより容易ならざる情勢の變化が起つた。即ち今や英米はソ聯を新興國家群の中より引き抜いて自己の味方とすることが出來、新興國家群の團結は破れた。加之英米は自己が第一線に立つて敵彈に曝らされることを避け經濟的援助を與へてソ聯をして獨逸と死闘

せしめる地位に置くことゝなつた。英米が獨逸に對する攻撃の爲めにとつたこの仕方はそれ以前より日本に對して取つて居た仕方である。即ち蒋介石軍をして直接日本に當らしめ、自己は經濟的資材を以てこれを助けて來たのである。かくて英米資本主義國はそれが世界的に支配しつゝある豊富な資材を以て支那とソ聯とを助けこれ等の國の兵力を以て日獨伊と戰はしめつゝあるのである。

この英米支ソと日獨伊との對立は膨大なる資源國と然らざる國との戰爭を意味する。この際膨大なる資源國は長期戰を欲するに反し然らざる國は短期即決戰を欲する。今日支那の日本に對する戰爭は、毛澤唐がその長期抗戰論に於て主張せるが如く、質に於ては高いが量に於ては小なる日本に對して質に於ては低いが量に於ては大なる支那が長期消耗戰を繼續し更に第三國の援助を自國に有利に日本に不利に展開せしめ結局に於て戰爭を自己に有利に導かんとするのである。この戰法は正にソ聯が今後獨逸に對してとると考へられるところのものである。

またこれが正に英米がソ聯並に支那に對して期待するところのものである。それ故第二次世界大戰は極めて長期化せざるを得ない情勢となつたのである。かくて獨ソ戰爭の開始と共に日本は獨逸並にソ聯よりも資材を得能はざる狀態に置かれるに至つたのみならずこの狀態が長期化すべき可能性が極めて大となつたのであるがこのことは現代日本にとつて容易ならざることである。今後日米の關係が一時緩和することあるとするも、英米がその東亞に於ける基地をシンガポール、マニラ等に確保する限り難局の解決を將來に延ばしその困難を更に増大せしむることとなる。それは恰も嘗てのロシアの基地旅順等についてと同様である。

「今や世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ制カラル所ナリ」とは紀元二千六百年式典に於て賜はりたる詔の御言葉であるが、その後一年の日本の現状はこの御言葉の意義を一層深く察し奉らねばならぬことゝなつたので

ある。誠にかくの如き長期に亘る難局に處する道は、短期武力戦ではなく長期に亘り更に政治・經濟・學問・教育等國家の總力を最大に發揮することである。この長期總力體制が確立してのみこの難局を突破し得るのである。<sup>1)</sup>省るに日本をしてこの難局に立つに至らしめたる根本原因はその指導原理が確立しなかつたことにある。然し更に考ふればかく指導原理が確立し得なかつた根本原因は國民的行動の論理が確立して居なかつたからである。一國民の行動の指導原理たるべきものは、行動の對象が異なるによつて異なる。例へば對外的なると對内的なるとまた對内的にも軍事、經濟、教育等領域を異にするに従つて指導原理は異なるのである。而もそれ等相異なる指導原理の根底に同一の論理が一貫し徹底して居るにあらざれば諸領域に於けるその國民的行動の結果が統一して眞に國家の總力となつて發揮されるには至らないのである。

國民なるものは自然・民族・歴史の一體としての個性的な生命體であつて、これが健全である限りその行動はこの生命體に固有なる従つてその國民全體を納得せしむべきところの論理によつて貫徹されて居るのである。現に世界に於て有力に働きつゝある國民について見るに、英國は資本主義の論理により、ソ聯は社會主義の論理により、獨逸は全體主義の論理によつて徹底的に行動しつゝある。その論理によつて國內新體制を確立し政治・經濟・教育等の一切の分野を貫徹し對外的にもその論理を以て一貫せる行動をなしつゝある。然るに今日の日本に於ては、これ等外來的論理が並列横行して居て日本の自然・民族・歴史より生へ抜き従つて全國民を納得せしむべき國民の論理が未だ明確にされて居ない。従つてこれ等相異なる論理に基く國民の諸種の行動は互に矛盾して國家の總力を十分發揮し得ることが出来ない。かくてこれまでの新體制運動の展開について見るも或は資本主義の論理によつて歪められ、或は全體主義の論理によつて歪められ、國家の總力を發揮すべき眞の體制を確立する

1) 今日の國と國との戦争が單に武力によつて決するものでなく、國家の總力によるものであることは、今日の世界戦争の事實が明かに示めてゐる。

までには至つて居ない。故に日本の長期總力體制を確立せんが爲めには、先づ日本の自然・民族・歴史より生へ抜き従つて全國民を納得せしむべき論理を明かにしなければならない。これに基いてはじめて眞に日本の長期總力體制なるものを確立し得るのである。

今日の日本に於て跋扈しつゝあるところの論理は *society* の論理と *Staat* の論理とである。*society* の論理は英國の自然と民族と歴史とより生へ抜いたところのものであつて、自己の利益を求める個を主體として一切の人間的存在を形成し行く論理である。また *Staat* の論理は獨逸の自然と民族と歴史とより生へ抜いた論理であつて、全體を支配する權力者を主體として一切の人間の存在を形成し行く論理である。先づ、これ等の論理が長期總力體制に對して有する意義を本質的に考へて見よう。

## 二 *society* の論理と長期總力體制

*society* の論理は、個人を主體とし個人の利己心による行動の自由を原則として認め個人の利益は自ら全體の利益に一致するとなすところのものである。この論理に立脚する個人主義體制に於ては個々人は自己並に家族の必要とするものを貨幣交換の形式を以て獲得しなければならない、従つて各人は先づ貨幣を得るために働かなければならない。かゝる社會に於ては財力を有する個人が支配的地位に立つことになる。これ即ち資本主義體制である。資本主義體制に於ては有産者階級が生産手段を私有してこれを利潤獲得の爲めに利用する。この資本家階級に自己の勞働を賣ることによつて生活し得るところのものが即ち勞働者階級である。これが資本主義體制の根本構造であるが、かくの如き體制は長期總力戰體制として如何なる意義を有するであらうか。

かゝる體制をもつて戦争に入る時には、先づ資本家階級の利潤が著しく増大する。これ今日の戦争は重工業的生産物を限りなく消耗するものなるが故に、戦争の用意並に戦争の開始はその製品に對する需要を著しく増大し以て限界生産費を急激に高め資本家の利潤獲得力を著しく増大する。その反面に於て軍備の爲めの物資の大なる消耗と國家の購買力の増大に伴ふ通貨の膨張は一般物價を著しく騰貴せしむる。而も國民大衆の収入はこれに伴ふて増大し得ざるが故に國民大衆の生活の壓迫は不可避となり來る。

資本主義體制下に於ける戦争はかくして有産者、無産者の階級對立を激化し遂に無産者階級による階級革命に至る可能性を有するものなることは、第一次世界大戦が事實を以て教へたところのものである。即ち露西亞、獨逸、更に伊太利はかくして社會的混亂に陥つた。されば第二次世界大戦の今日に於ては、各國はこれに學んで早くより資本主義體制の自由に對して強力な統制を加へたのである。

今日この自由を尙ほ多く有せるものは米國である。舊大陸よりの植民者によつて市民社會的に建てられ、古代の歴史も中世の歴史も有せざる典型的な資本主義國家米國は、第一次世界大戦に當つては尙ほ若き資本主義の發展過程にあつたが故に、資本家と勞働者との階級對立が激化することとなかつたが、この大戦の結果資本主義的に著しき發展を遂げ、大資本家階級の固定化し來れる現段階<sup>1)</sup>に於ては事情を異にする。即ち戦争への参加が進み更にその戦争が長期化し來る時、本來個人主義的自由を以て建國の精神とするこの國が果してその資本主義體制的社會主義的轉化の危險を抑制し得るであらうか。今日世界資本主義體制的保持に全力を擧げこれが爲めの武器製造工場と成つて諸國を支配し得意の頂上に立てる米國の前途に横はる危機は、本來高度資本主義國家を對象とせしところの社會主義の階級革命にとつて正に典型的な國となることである。

1) ルンドバーク著和田克巳譯改造社版「アメリカを支配する六十家」參照。



これを要するに society の論理に立つ資本主義體制なるものは、その本質上長期總力體制たることを得ない。

### III Staat の論理と長期總力體制

次に全體主義體制の長期總力體制としての意義を考へて見よう。

Staat の論理に立脚する全體主義體制なるものは、全體を支配する權力を把持するところの權力階級が主體となれる體制である。その單純なる形態はこれを封建體制に於て見る。そこに於ては、全體を支配する權力の把持者としての將軍並にこの將軍に生死を誓へる武士團が支配的地位に立ち、所謂「據らしむべし知らしむべからず」の態度を以て大衆に對するのである。一國一黨なる語は一見新らしきが如くであるが、こゝに既に見られるところのものである。今日の全體主義體制もその主體的原理に於てはこれと異らざれども、中世の全體主義が資本主義體制發展以前のものであるに對し今日の全體主義は資本主義體制の發展の結果に於て成れるものである。即ち資本主義體制の發展の結果有産者階級と無産者階級との對立が激化し來り社會主義的革命の混亂に陥るまでに至りたる後、この混亂を克服すべくこれに強權を加へたところのものである。かくて今日の一國一黨の強權的支配の下には市民社會が依然存して居るのであつて、そこには資本家と労働者との階級的區別も事實上見られるのである。ヒットラーを「Führer」「指導者」とし國民がこれに「Gefolgschaft」「隨伴」の關係にあることによつて Gemeinschaft「協同體」を爲せる今日の獨逸の體制はその典型的なものである。

ハーゲルが人間の最も具體的な存在としたところの Der Staat なるものは正にかくの如き構造を有するものである。即ちその最高の原理は die fürstliche Gewalt「王侯の權力」であつてそれは神より使命を受けて居るもの

で、正に今日のヒットラーの地位に相當する。<sup>1)</sup>

然らばこの全體主義體制なるものは長期總力體制として如何なる意義を有するであらうか。かくの如き體制はその指導者に人を得る時これまで混亂せる社會に急激なる勃興を與へるところのものである。

現代獨逸の全體主義體制は、本來全體主義的な國體を有する獨逸が社會主義化され、ベルサイユ條約の束縛の下に於て困廢し切れる時、これを急激に勃興せしめ僅か七年にして今次の大戦を爲すべき巨大な武力を作り出したのである。

然しその指導者なるものが全智全能の神でなく人間である以上この全體主義體制の限界なるものも明に考へなければならぬ。<sup>2)</sup>ヘーゲルは世界史の展開の指導者たる *der weltgeschichtliche Mensch* 「世界史的人間」又は *Hero* 「英雄」について次の如くに述べて居る。彼等は「實踐的政治的人間」であるが同時に「思惟する人間」であつて何が必要であり、而して爲さるべき時期に達してゐるかについて洞察をもつてゐる。それが正に「彼等の時代並に彼等の世界の眞理」である。彼等の仕事はこれを知ることであり、これを自分にとつて目的とすることであり、而して彼等の精神をこの目的に傾注することである。この進んで居る精神は、總ての他の個人の内的な心であつて面も無自覺な内面性であるところのものを人々に自覺に齎らすのである。それ故に他の人々はこの心の案内者に隨ふ。かくる英雄は、その仕事が進めば「核實の空虚な皮の如くに脱落して了ふ」彼等はアレキサンダーの如く早死し、ケーザーの如く刺され、又ナポレオンの如く流される。かくて彼等の運命は決して幸福なものではない。以上は獨逸の代表的哲學者ヘーゲルの述べて居るところであるが、第一次世界大戰に於てカイザー（將軍）として戦ふたウイルヘルム二世の運命もこれの例外ではなかつた。

1), 2) 拙稿ヘーゲル歴史觀の實踐的構造本誌第三十六卷第五號参照

かくて全體主義體制なるものは個人を最高の原理とするものなるが故に、その個人に人を得た時には急激に勃興するが而もそれが個人であるが故に個人の限界に達した時にまた急激に没落するのである。かくして全體主義體制は急速に勃興するがまた急速に没落しその間が切斷されるが故にその國運は結局大なる進展を示めし得ない。このことはカイザーの獨逸と今日のヒットラーの獨逸との關係に於ても見られるのである。

かくて Staat の論理に立てる全體主義體制なるものも決して長期總力體制として十分なものではない。

今日のソ聯は無産者階級を主體とすると云ふ意味に於ては社會主義體制であるが、事實上スターリンを指導者とする共產黨の少數幹部が全體を專制的に支配する權力を掌握して居るのであるが故に、この點に於ては以上全體主義體制について述べたところのものが妥當するのである。

かくして society の論理も Staat の論理も長期總力體制の論理としては十分なものではない。前者はその根本に於て個人の利己心を原動力とするが故にこの利己心を刺戟し得る限りに於て社會の力を大いに發揮せしめ得たことは事實である。然し個の利己心に立てる體制が長期に亙る難局に處して全體の總力を十分に發揮し得ざるに至ることはむしろ自然である。この點に對して Staat の論理は全體を支配する權力を強化し一切をこの統制に服せしめて國家總力を發揮せんとするものである。而も或る個人を最高原理とする體制には眞の恒久性なく、更に「據らしむべし知らしむ可からず」の態度を以て國民に臨むものなるが故に國民各自をして受動的ならしめ眞に自發的に總力を發揮せしむることは出來ないのである。故に Staat の論理も眞に長期權力體制の論理たるを得ないのである。

かくして眞に長期總力體制の論理たるものはこの Staat の論理と society の論理とを止揚したところの最も具

體的な論理でなければならない。これが即ち「いへ」の論理と云はるべきところのものである。

#### 四 「いへ」の論理と長期總力體制

日本の「いへ」なる語は今日西歐的に歪められまた個人主義的に歪められて居る。西歐にては原始共同體なるものが民族大移動によつて全體主義的に破壊されこれと共に「いへ」的な精神も破壊されたが更に中世に残存してゐた「いへ」的なものも近世への轉換期に於て個人主義的に破壊された。かくて「いへ」なるものは family 又は Familie として society 又は Staat 以下のものを意味するに過ぎない。然るに文化大陸に近き島國としてその文化を攝取しながら、而も外部より侵されることなく一貫せる發展を遂げ來つた我國に於ては、「いへ」の精神が國の單位にまで擴充されて國も「いへ」として考へられる。更に「掩八紘爲宇」と云ふことは今や「世界を宇と爲し」として全國民によつて畝はれて居る。かくの如く日本の「いへ」なる語は西歐の Familie 又は family の如く家族なる狭き人間の存在を指示するに止まるものではなく、廣く人間的存在を具體的に構成する爲めの理念である。故に日本國民の本來の論理は事實上この「いへ」なる理念を展開したところの「いへ」の論理であつた。支那印度西歐等の外來文化の同化もこの論理に基いてなされた。またこれを日本の變革期について見るも、これを突破し國民史を一貫して推し進めて來た國體の論理は正にこの「いへ」の論理であつた。即ち大化の改新は氏族團體の畝跨が天皇中心の本來の國體を危くするに及んで、斷行されたものであるが、その後七、八十年にして成れる古事記日本書紀に於ては全く「いへ」の論理を以て日本の國體が基礎づけられて居る。即ち日本の國土人民の一切は伊弉諾伊弉冉尊より生れ出でたるものであり、天皇はこの神の直系であらせられると考へられた。かくして日本の

1) 拙稿『日本的創造と「いへ」の論理』昭和十六年十一月二十日京都帝國大學新聞、參照

國體は 天皇を中心とする「いへ」なのである。また明治維新の指導原理として最も重要な意義を有した『維新の詔』について見るも、明治天皇は「億兆の父母」と「赤子」との關係を以て君民の關係とせられ「君民相親しみて上下相愛し德澤天下に洽」きことを以て日本本來の國體であるとされて居る。<sup>1)</sup>

今上天皇の御即位の詔に於ては「皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ」と仰せられて居る。

かくの如く事實日本の國民史を一貫したところのものは「いへ」の論理であつたが、これまで國民がこのことを十分に自覺してゐなかつたが故に、西歐文化の入るに及んで英國の *society* の論理又は獨逸の *Staat* の論理に壓倒され國民の行動の論理としての力を失ふに至り、かくて日本國民の行動が確立し得なくなつたのである。故に、今日日本國民の行動を確立せんが爲めには、この「いへ」の論理を *society* 並に *Staat* の論理を止揚することによつて更に具體的な論理として展開確立しなければならないのである。

この論理に於て人間の本質的な存在として考へるところのものは「いへ」である。「いへ」なるものに於ては全と個とは *Staat* 又は *society* に於けるが如く外的に對立してゐるものではない。「いへ」の全はそれに於て總ての個が置かれてあるところの場所であつてこの全は總ての個を包擁しこれを愛し各自の個性存分に生かすところのものである。また總ての個はこの全に感謝してこの全の働きを各自の能力次第に分擔しこれを自己の職分となし力を盡してこれを實現する。かくて個を通じて全體の働きが十分に發揮され、この全體の働きによつて總ての個が十分に生かされ従つて一層よく全體に盡すこととなるのである。かくて「いへ」に於ては全と個とが相愛し一體

となつてゐるのである。愛すると云ふことは他にあることである。全が總ての個を愛すると云ふことは全が總ての個になつて見、考へ、行ふことである。總ての個が全を愛すると云ふことは、全になつて見、考へ、行ふことである。

「いへ」なるものはかくの如く全が總ての個を生かし總ての個が全に盡すことにより恒久的に發展し行く生命である。従つてかくの如き全と個との關係が確乎不動なることによつて、「いへ」の發展は確乎不動なるものとなる故に「いへ」が恒久的な發展を遂げ得んがためには、この全と個との關係が確乎不動でなければならぬ。この爲めにはこの全と個とを結ぶところのものが確乎不動でなければならぬ。これがこの全體と個體とを結ぶものとしてこの全實在の中心を成すところのものである。この中心は全實在を擔ひ全實在の立場に立てる者としてそこに於てある總ての個を包擁しこれを愛しこれを生かすところのものである。またそこに於てある總ての個はこの中心より生かされるものとして中心に誠を致すのである。かくして全が個を生かし個が全に盡すと云ふことは、この中心を通して行はれるのである。故にこの中心が確乎不動なることによつて、この實在に於ける全體と個體との關係は確乎不動であり、かくてこの實在の恒久的發展が遂げられるのである。

かくの如き實在は恒久的發展的生命であつて、總ての個の生命を越へたものであると共にまた總ての個によつて支持されるものである。總ての個はこの實在の中に生れ出てこの實在によつて生かされると共にこの實在の働きを分擔し實現することによつてこの實在の存立とその將來の發展に對して貢獻するのである。この際個は、過去より將來に發展し行くこの實在の全生命となつて見、考へ、行ふことによつて眞によくこの全實在に盡すことが出来るのである。この實在の中心に立てるものは、この全實在の恒久的發展的な全生命の立場に立つてそこに

生れ出づる總ての個を愛しこれを眞に生かすことが出来るのである。かくしてこの全實在は恒久的に發展し行くのである。

この「いへ」の論理はかくの如く、全と個とを眞に内面的に統一するものであるが故に、全體主義の *total* の論理と個人主義の *Society* の論理とはこれに於ては全く統一止揚されるのである。

この「いへ」の論理が日本の國體の論理である。即ち家庭に於ても國家に於てもその全實在を體現せる中心がありこの中心と個との關係は愛である。この中心は家庭にあつては親であるが日本の國家にあつては天皇であらせられる。中心より子に對する愛は家庭に於ては慈愛、國家にあつては仁愛である。個の中心に對する愛は家庭に於ては孝であるが國家に於ては忠である。かくて家庭と國家とが全く相似形であつて、小さき「いへ」が大きき「いへ」に於て安らに保持されて居る日本に於ては忠孝一致である。

今日の日本がこの世界的非常時局に處する道はこれまでの國民史に於けると同様にこの「いへ」の論理を内外に徹底することより外ないのである。

紀元二千六百年式典の詔に於ては「今や世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カルル所ナリ爾臣民其レ克ク嚮ニ降タシシ宣諭ノ趣旨ヲ體シ」と仰せられて居るが、この御宣諭たる紀元二千六百年紀元節の詔に於ては「和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ」と仰せられて居る。更に國體の精華を「歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ君民一體以テ朕カ世ニ逮ヒ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ」と仰せられてゐる。

この國體の精華を益々發揮するが爲めには、先づ「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ」との大御心を益々發揮しなければならぬ。この爲めには今日家庭と國との間が *society* 即ち個人主義社會を以て充されてゐるところのものを「いへ」の社會を以て充さなければならぬ。この「いへ」の社會が即ち家庭を成員とせる隣組より町内會、聯合

町會と高まりまた部落會、村會と高まり以て國家にまで至るべき地域の共同體である。これ等のものが「いへ」の精神を以て貫徹せられて運営されたる時、家庭と國との間は更に「いへ」の重層的構造を以て充たされることとなる。この「いへ」の重層的構造を通じてはじめて「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ」と云ふ大御心が十分に實現し得るに至るのである。social 即ち個人主義社會に於ては、一切のものが商品として金次第に賣買されるのである。故に衣食住、醫療、教育等國民として絶対に必要なものと雖も金のないものには全く與へられないのである。地域に於ける「いへ」の重層的構造が確立し仁愛の化が下に及ぶ爲めに必要な設備がそれぞれになされ、「いへ」の精神を以てこれが用ひられる時こゝにはじめて「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ」との大御心が十分に實現し來るのである。

「下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ」と云ふこともこのことによつてはじめて十分に實現し得るに至るのである。即ち國民が衣食住、醫療等絶対に必要なものに不安なくしてはじめてその職分に全心を傾倒し得るのである。また國家は恒久的發展的生命であるが故に、次の時代に第一線に立つべきものに、その能力次第に十分に教育が與へられることによつて、國民全體の能力が最大に啓發せられこの能力を以つて忠厚が最大に發揮され得るのである。

然し國民がその能力を以て國家に最大に盡し得んが爲めには、更に職域自體が「いへ」の重層的構造を以て、充されなければならない。即ち經濟、教育等それぞれの職域が「いへ」の論理を以て構成され、更にその中にあつて諸種の分野が「いへ」の論理をもつて構成されなければならない。而してこれ等の「いへ」の中心に立てるものは、「いへ」の全體を擔ひその全成員を愛し各自をしてその能力を喜んで存分に發揮せしめなければならない。これと異なつてその長たるものが全體主義的な態度を以てその成員に對するならば、成員は眞に自發的な力を發揮しな



いのである。故に長たるものが「いへ」の精神に徹してはじめて成員全體が「いへ」の精神を以て應へ、かくてそのものが益々「いへ」となり最大の力が發揮されるのである。

「下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ」と云ふことは國民がその人的能力を以てすることだけではない。このことは更に國民各自の有する財力にも及ぶのである。抑もこの財なるものは單に個人が作つたものではなく、この國家に於て作られこの國家によつて保護されて居るところのものである。<sup>1)</sup>この國の「いへ」の子たるものは、この「いへ」の必要とする財力をこの「いへ」の爲めに喜んで用ゆべきところのものである。殊に國民の少なからざるものが、この國家の爲めにその生命をも捧げることによつて忠厚を致せる時に於ておやである。國家總動員法なるものはこのことを法的に規定したのである。故にこの法は「いへ」の論理の立場より理解さるべきところのものである。

かくて國民の總てがその生命・能力・財力を以て國家に盡すとき、國家の總力は最大に發揮され、國家の活動は内外に向つて最も有功に實現するのである。かくて「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ」と云ふことも愈々具體的に實現し來るが故に、このことによつて「下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ」と云ふことも益々具體的に實現し來るのである。

以上は「いへ」に於ける全と個との關係を主として考察したのであるが、次にこの「いへ」に於ける個と個との關係について考察して見よう。

この「いへ」なるものに於ては、多くの個がこれにあつて生かされこの「いへ」全體の働きを分擔しこれに盡しこれを發展せしめ行くのである。故にこの個と個との關係は、同じ「いへ」に於て生かされ同じ「いへ」の恒久的發展的生命となつてこれが爲めに働くものとして相互に共同的に結ばれ而も相異なる能力を以てこれに盡くすものとして相互に敬愛の關係を以て結ばれてゐるのである。このことは「いへ」を形成する個人相互の關係についてもまた諸種の領域相互の關係についても云はれ得る。この個が相互に尊敬し合ひ他をして十分にその能力を發揮せし

め合ふことによつてはじめてその「いへ」全體の總力が十分に實現せられ、その「いへ」の過去よりの發展を完ふし將來への發展を益々旺ならしめることが出来るのである。これに反して一つの個人又は領域が他を輕んじその働を壓迫するならば「いへ」全體の生命にとつて必要な働きはこの部分に於て阻害せられこのことがやがて他の個人又は領域の働きを阻害しかくて「いへ」全體の眞の發展を障害する結果となるのである。即ち眼前の事情にとらはれて「いへ」全體の恒久的生命となつて働くことが出来なければ、所謂「遠慮なきものは近憂あり」と云ふことが事實となつて現れ来るのである。故に各々の個は「いへ」の全體的生命の發展に對する自己の職分の意義を十分に自覺し、他よりの不當なる壓迫に對しては「いへ」全體の爲めに斷乎として自己の職責を守らなければならぬ。また一見對立するが如くに見える他の個も同じくその「いへ」全體の生命を愛しこれが爲めに自己の職責を行ひこれを重んずるものである以上、相互に胸襟を打開いて意志を通ずるならば相互に同じ「いへ」の眞の發展を願ふものとして十分なる理解に到達し一層深く相結び相助けて全體の發展に盡すことが出来るのである。かくて一國の諸領域の全體が國家全體の生命の發展の爲めに相互に敬愛する關係に立つてこそ一國の恒久的なる發展が眞に全ふし得られるのである。日露戰爭の際長くも明治天皇は東京帝國大學に行幸せられ「軍國多事ノ際ト雖モ教育ノ事ハ忽ニスヘカラス其局ニ當ル者克ク勵精セヨ」との詔を給はつたが、長期總力體制に關する深き御聖旨をここに拜し奉るのである。現代日本もまたこの御聖旨を奉體して進まなければならない。

要するに長期總力體制を眞に確立すると云ふことは「いへ」の論理を徹底することによつてのみ可能である。この日本にしてはじめて白人の壓迫下にある東亞諸民族に「いへ」的に働き東亞を「いへ」とすることが出来更に世界に「いへ」的に働き世界を「いへ」とすることが出来るのである。この世界の「いへ」が世界の長期總力體制である。

「人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラソコトラ期セヨ」との大御心はかくして實現するのである。

1) この世界が長期に亘つて總力を發揮し得る體制が人類の最高の體制であることは、以上國民について述べたと同様に論じ得る。